野村生涯教育だより

No. 423

（公財）野村生涯教育センターのシンボルマーク
［n］は、名称「Nomura」と、基本理念「自然観＝Nature」の頭文字を表している。

発行所
公益財団法人 野村生涯教育センター
東京都渋谷区代々木 1-47-13 〒151-0053
TEL 03-3320-1861　FAX 03-3320-0360
URL www.nomuracenter.or.jp

もくじ

● 新型コロナウイルスの課題 3
● 「新型コロナウイルスの課題」海外からの反響
● 幼児教育部点描
● インドネシア在住のメンバーから

奥多摩・新緑の海沢

例年のゴールデンウィーク（GW）と違って緊張感を伴う長期休暇が終わり、自粛を踏まえた平日の生活が戻ってきました。

心配されていた感染者数は減る傾向になり、五月十四日、緊急事態宣言が三十九県で解除に、また二十一日には八都道府県のうち関西二府一県が解除、関東一都三県と北海道が継続しての自粛要請になり、二十五日には全面解除となりました。

この感染者の減少は、日本においてはPCR検査が増えていかないため、その正確性は疑問視されていましたが、それでもGW中、多くの国民が自粛要請に従い、意識を持って努力した結果だと思います。

しかし、これで終息の方向に向かっているのではない、と多くの専門家がおっしゃっています。大枠で言うと、この減少傾向は一時的で、寒くなっていく秋・冬以降、第二波は必ずくる、もしかしたら第三波もあるかもしれない。そして全世界の人口の六～七割程度の人が罹らないと終息はしない。この間一年半から二年、それまでウイルスと共存しながらワクチンができるのを待つ、というのがこれからの流れだということです。

私たちは、これまで意識を持って努力したことで減少したことをしっかり受け止め、その上で今どの段階にいるのかも、今後に向けて厳しく見ていかなければなりません。

GWが明けて、今大きく問題になっているのが、経済です。これは業種によっても、その影響に差がありますが、どちらにしてもその影響は今後一層出てくるでしょうし、ウイルスのこれからの有り様を含めて考えるとき、自粛一辺倒では、経済ベースの生活が成り立たない。直接的に命に関わるウイルス対策と同時に、経済の逼迫による生活の困窮、延いては命の危機に及ぶことまで考えていかなければならないことを思います。

新型コロナウイルスの課題3

理事長　金子由美子

また医療崩壊の問題も、今は減少傾向に転じ崩壊が避けられていますが、今のうちに第二波を想定した準備の大事さが言われています。

自粛が続き、常にコロナウイルスで頭の中が埋められているような気分の中、ふと去年から今年の年明けに私たちはどのような状況にあり、どのような意識で、何を見、何を考えていたのか、そんな思いになりました。

昨年も世界的に自然災害が頻発した年でした。地震や水害、火山噴火など至る所で被害がありましたし、また昨年九月ごろから発生したオーストラリアの火災は年を跨いで消火に至らない、との報道はとても気になるものでした。日本でも台風の本土上陸の数が増え、被害が全国で見られました。しかし今年の日本は、いよいよオリンピックイヤーを迎え、経済の活性化が見込まれ、日本の活躍に期待が持たれていたと同時に、日本の夏の暑さに、庶民の私でも、選手や海外の方たちの健康は大丈夫なのか、と心配になっていました。

そう思うと、今、数カ月前まで頭で考えていたこととは違う現実があります。

今回の新型コロナウイルスがなぜ出現したか、さまざまな研究がされています。世界保健機構（WHO）によると、自然界ではコウモリを病原とする可能性が高い「人獣共通感染症」だとのことです。

そして自然保護団体のNPO法人「エコロジーオンライン」の上岡裕理事長は、四月九日付の新聞記事で、今回の新型コロナウイルスの蔓延は地球環境破壊が生み出した、と指摘されていました。自然破壊によって、住む場所を失った野生動物が餌を求めて人の住む町に出てきたりして、人と動物が接触することになり、新たな感染症が生み出されている、ということです。また自

然破壊による大きなストレスを抱える動物は感染しやすい状態になっており、その感染症が人にうつり世界中に広がったのが、今回の大流行を生んだ基本的な構造であるとおっしゃっていました。また温暖化が動物の生息域を北上させ、熱帯性の感染症が世界に広がるきっかけになっているとのことです。

まさに、温暖化もウイルスも、人間の経済活動が一つの要因であることは認めざるを得ないのではないでしょうか。

事実、新型コロナウイルスの出現により、世界的にロックダウンや自粛が行われた世界は、温室効果ガスの排出量が二十五％減少したそうです。インド北部パンジャブ州では、大気汚染によって見えなくなっていたヒマラヤ山脈が三十年ぶりに見えるようになり、また中国の大気汚染も劇的に改善。アメリカ・スタンフォード大学の研究によれば、この大気の改善により最大七万七千人もの命が救われた、という説もあるそうです。

またハワイでは観光客の激減で、ビーチに大量のウミガメが集まってきているとか、ベネチアでは、観光客が捨てたごみが浮かんでいた運河が澄んできて、底に一部の魚たちが泳いでいるのが見えるようになったり、また英国・ウェールズでは自粛中の人間のいない町にヤギの群れが出没している、と報道されていました。

まさに、前回の機関紙（四二二号）に「私たちは自然界に生物（人間）として他の動植物と共に生きてきた歴史をもちます。なのに、日々の生活のなかで無自覚でいますが、他の動植物の生存場所を開発のために奪ってしまっている。その結果、今の時代が生み出されているのではないか。『自然界に生かされている人間』という観点から見ると、そのように思うのです」と書いたように、人間がいなくなったところに、動物たちが居場所を求め、戻ってきているとも見えます。

こういった専門家の見解、そして経済的状況、またウイルスの出現がなかったとしても、生態系のバランスを失っている如くの異常気象、そしてあまりにも経済に偏った、見える世界の成果・結果を重視しすぎた私たちの生き方を、見直していく必要を思います。

経済が復活していくことはとても重要なことだと思います。しかし、コロナ以前に戻っていくことを願う、とすると、また同じようなことを未来に繰り返すのではないか。

人間も他の動植物と同様、この地球に共に生き、生かされている、生物としての側面と、目に見える現象世界だけではない、精神という見えない世界を持つ存在である、という認識を持つことの重要性を念頭に、この新型コロナウイルス以後の世界を見据え、この課題を受け止めなければならないことを思います。

人間の基本、つまり、人間そのものが持つさまざまな側面、他の動物と同じ命をもつ生物であり、見えない心をもつ精神的存在でもあり、群れを成す社会的存在でもある。こういった側面を持つ人間の基本を見直し、必要あって生み出された社会に存在するさまざまな界層・分野の統合とバランスを取っていく世界をめざさなければならないことを思うとき、そういった概念を踏まえた、人間教育の重要性を思います。

今「命か経済か」というようなことが言われています。

物事の右か左を決めることはもしかしたら楽かもしれません。でも右も左も、そのバランスを取ることは本当に難しいです。しかし、人間そのものが絶妙なバランスの中に生かされ、生きていることを思うとき、私たちが人間としてのバランスを欠いた生き方を見つめ直し、一人ひとりが主体的に、自らの人間としての可能性を啓き出していく、そういった社会の実現を目指し、世界が英知を寄せ合い、協力し合うことを願いたいと思います。

（五月二十五日記）

「新型コロナウイルスの課題」海外からの反響

日本でも新型コロナウイルス感染症が拡大傾向に向かい始めた三月、その事態に対して、金子理事長は「新型コロナウイルスの課題」と題したメッセージを本紙四二一号に掲載した。既に同じ状況下にある当センターの国際ネットワークの方にも是非読んでいただきたいとの願いから、メッセージはすぐに翻訳され、海外支部責任者はじめ長年深い交流を重ねている方々に送られた。

世界が感染拡大の一途を辿った四月、各国より届いた感想を紹介する。

○ハンス・ケッヒラー氏（ＩＰＯ国際進歩機構会長・オーストリア）

この世界的な健康危機についてのあなたの分析に全面的に同意いたします。国内的にも世界的にも、私たちの共同責任について今まさにふり返るチャンスであると思います。

世界は利潤最大化に駆られ、人間性の開発と精神の価値を徹底的に見落としてきたグローバリズムの概念を再考しなければならないでしょう。金子理事長がまさにおっしゃるように、外なる環境という側面に重点を置くのではなく、我々人類は〝一人ひとりの人間の内にある〟可能性に焦点を当てるべきです。この危機的な時に、あなたさまをはじめノムラセンターの皆さまが強い精神力を持たれ、そしてご健康に過ごされることを願っております。

○ノーマン・グレーブス氏（ロンドン大学教育研究所名誉教授・イギリス）

この度の記事はこれまでのようにノムラセンターの本質的なメッセージと、創設者の精神を継承された賢明な言葉に溢れていました。この現在の危機は、私たち個々人と社会が持つ目的を考え直し、一人ひとりが利他的に振る舞うことに重きを置きながら家庭や社会における生き方を見つめ直す機会であることを、まさしく強調されていました。もしそのような変化が起きるならば、現在の持続不可能な地球資源の奪い合いは減少し、富のより公正な分配が実現されるかもしれません。これは大変困難な課題かもしれません。しかしながら私は、ノムラセンターがこれからも取り組まれていくべき課題ではないかと思います。

○パトリシア・ミッシェ女史（アンティオックカレッジ平和研究・世界法名誉教授・アメリカ）

この厳しい状況下にあなたとノムラセンターの皆さまが心身共にお元気でいらっしゃることを願っております。まさに今、自己を見つめ「人間とは何か、己とは何か」について考える時であるというお考えに心から賛同いたします。最後の一行「見えない心、精神があることに意識を持ち、人間の内なる自然に可能性を求めていくこと」は、自己をふり返るための意義深さと含蓄に富む言葉であると思います。

人間の身体を蝕む破壊的なウイルス撲滅の手立てを探求する科学と共に、私たちが存在する自然界、同時に私たちの内にある自然界に、私たちの心・精神を調え合わせていく必要があると思います。家に留まり、人と距離を置き、一人にならざるを得ない今こそ、私たちは内省し、人間の内なる自己をより深く知る機会なのだと思います。

○マグナス・ハーベルスラッド氏（ノルウェー工科大学名誉教授・ノルウェー）

今という時は生涯教育を実践し、それぞれの人間の力を示す時だと思います。それは自然からの、また、我々の政治的、文化的リーダーからの求めに応えての、自分自身を変える道を見いだすということでしょう。そして、最大の課題に直面しているなかで、自分自身の幸せと、国や社会をも含めた他者の幸福のために貢献する方途を模索し、学ぶ時だと思います。

私たちが共有するこの事態には共通の解

決策が求められています。つまり、私たち人類が、地球規模で協調し、コロナウイルスに限らず、貧困、暴力、気候変動や圧政などのあらゆる問題に対処していく道を見つけるべきだということです。

おそらく、この新たな学びの経験は、このウイルスや他の病気をいかに私たちが治していくか学んでいく、これまでとは違う新たなグローバル化に向かう手助けになるのかもしれません。

その意味で、私たちの内なる人間性の素晴らしさを最大限に発揮できれば、すべての人々の幸福のために協力し合う、より大きなチャンスになるというメッセージを有難く受け止めました。

○アマル・アブゥ・エマラ女史（パレスチナ支部責任者）

ここガザにも春が訪れ、花が咲き、鳥が囀り、晴れた空の下、海が澄み渡っています。人間の妨げがないからか、自然が自らその美しさを新たにしているように見えます。私たち人間が外に出ないことを、自然は喜んでいるのでしょうか。それは新型コロナウイルスがもたらした良い面なのでしょうか。自然の摂理に人間はいつも驚かされます。本当に今という時は、あなたがおっしゃるように、自分自身を見つめ、周りの環境との繋がりについて考える時なのだと思います。

私たちのことをご心配くださりありがとうございます。私たちは元気です。そして、包囲の下でも、コロナウイルスや貧困に直面していても、魔法のような力強さを持って生きているガザの人々から多くのことを学んでいます。

私とガザチームのメンバーであなたの貴重なメッセージをアラビア語に翻訳しました。それをもとに、今直面しているあらゆることを、人生に触れ合う教材としてどう捉えたらよいか話し合います。若者たちがこの経験をどう受け止めて未来に向かうのか、また彼らの言動行動にどう影響していくのだろうか、と関心を持っています。私のここでの役割は、子どもたちに、すべてが当たり前ではないこと、そして時には最悪の事態にも備えなければならないと教えることだと感じています。

○マリア・ツォンコバ女史（ブルガリア支部責任者）

この度のあなたのメッセージは、野村生涯教育論をもとにこれまで書かれてきたものと同じく、私に活力を与え、そして挑戦する気持ちにさせてくれました。私たちは今、人間としての位置づけと役割を思い出させる、このような言葉を必要としています。

私は常に野村哲学の実践的な側面の素晴らしさを思ってきました。特に今そのことを、これまで以上に感じます。この感染拡大のもとでの生活が、私たち、世界中の人間すべてが自然と繋がり合い、関係し合っているという現実を証明しているからです。野村生涯教育の核である、全体性、相互依存関係、連続性が、今私たちの目の前に見えるような思いです。

より多くの人がこの真実に気づくことを願います。なぜなら世界の人々がひとつになっている今、この災厄によってなのだとしても、それが可能であると証明しているからです。

こちらでも外出自粛中のため、昨年支部で行ったセミナーの参加者四人と近々オンラインでワークショップのようなものを行う予定です。大変興味深いものになりそうです。その際あなたのこの記事を読ませていただきたいと思います。

幼児教育部点描

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、外出自粛を余儀なくされ、私たちの生活形態は大きく変化している。家族の繋がりや身近な人間関係において課題に直面し、深刻な事態にまで発展してしまうような中で、人間とも他の生命体とも〝共に生きる〟私たち一人ひとりの意識の在り方が問われる今、本紙バックナンバーから、命の繋がりをテーマにした幼児教育部の記事をお届けする。

子どもの教育は いついかなる場合にも 親の自己教育

（二〇一七年六月二十五日発行　三八八号）

六月の全国講座では「野村佳子生涯教育論 第二章 野村生涯教育の構想」を学んだ。

幼児教育部では母親が全国講座で学んでいる間、交替で子どもたちを担当し、相互教育の場を設けている。講座の最終日、全体会で母親たちが「第二章」の講義と、子どもたちの様子を通して収穫となったことを発表した。

Jさんは「講義の中で『野村生涯教育原論』の中にある創設者の『戦争を絶対悪として排除するのは〝いのちがいとおしい〟からであり、敵も味方もなくすべてのいのちが尊く、冒すべからざるものであることを根拠とするからです』という箇所を聞いた時に、子どもたちを見ていて感じたものはこのことだったのだと思った。それは朝、部屋を出る時になって、娘が宿泊するのに用意した新しいスリッパを友だちに見せたいと言い出した。それはパッキングした荷物にあるので、めんどうだったがまた後でぐずられても困ると思い、渋々出してやると、他の男の子が履かせてやると言い出し『自分で履く―』『履かせてあげる』と取り合いになった。朝食の時間も男の子はしょんぼりしていたので、私にはまださっきのことを引きずっているのかなと見えたが、さっと娘の所に来て『さっきはごめんね』娘も『いいよ』と言った。何気ないやり取りだが『子どもって純粋で、本当にかわいい』と思った。また当番の方に日中の様子を聞いたら、娘が蟻を潰している子に『やめな！蟻さんにはお父さんとお母さんがいるかもしれないよ、おうちに帰るかもしれないよ』と注意していたと。私は『うちの子がそんなこと言ったのですか？』と何度も確認した。なぜならいつもは娘が蟻を潰し、私が『ダメでしょ』と注意していたので。その後皆でお墓を作って、花も供えたと聞いた。私は講義で聞いた『いのちがいとおしい』の思いになったから、子どもたちに伝わり、変化があったのではないかと思った」と発言した。

それを受けた金子理事長は「子どものことでいろいろ悩んだり、苦しんだりすることを同じ子どもをもつ立場の人と共有することは、とても安心できるのですよね。そういう場を創設者が作ってくれたから、そして学んでいるから〝いのちがいとおしい〟と思えたのよ。Sちゃんが『ダメだよ、踏んだら、お父さんもお母さんもいるかもしれない、おうちに帰るかもしれない』と言えたのは、今日『継続教育の各時期の特色』のところで『幼児期は両親をモデルとした模倣の時期』と学び、また『生活の教育化』でも学んだように、無自覚に私たちは背中で子どもに教えている。乳幼児期が生物的要素を多くもつと学び、有形、無形に親の姿が子どもに影響している、ということ。だから親の意識のあり方が大事だということなのですよ」と応えた。

またMさんにも「うちの子は思い通りになるまで、しつこくするダメな子と見ていたところから『各時期の特色』を学んで、それは成長のプロセスで、当たり前なこと。×ではなかったのだと思えたことは良かったですね。それは子どもがお母さんに受け入れてもらったということなのですよ。

二人の話を聞いていると、そういう子どもの姿に感謝しているように聞こえるけれど、親であるあなたたちが講義を聞いて、大事なものを受け止めたから、子どもがそうなったのよ。私たちは見える世界が絶対だから、子どもの変化を喜んでしまうけれど、子どもが変わったのは、親が学んで自分の意識が変わらせてもらったから、変わったのよ」と応えた。

若い母親たちは『各時期の特色』の乳幼

児期を学び、母と子の関係は人間関係のプロトタイプと知り、親である自分たちの自己教育により一層励みたいと思った。

朝顔の種まきから

（二〇一六年六月二十五日発行　三七六号）

幼児教育部では、親子が共に毎年種や球根から季節の花々を育てている。「種から芽が出て、茎が伸び、葉が出て、花が咲く、いのちの不思議さを子どもたちに実感してもらいたい」という創設者の願いから、三十年ほど前から始まり、種や球根、土はずっと代々の先輩たちから受け継がれてきた。

そのなかで五月に行われた土づくりと朝顔の種まきから幼児教育部の母親たちの学びの実践についてレポートする。

土づくりは、一ヶ月以上前から天気の良い日を選び、母親たちが、前年に使った土を天日に干し、乾燥させて、ふるいにかけ、種まきの準備をしなければならない。

園芸担当のMさんは、昨年夏に三女を出産し家で過ごすうちに、幼児教育部へ通うのが億劫になってきていた。メンバーたちは理事からの指導を受け、何度も連絡を取り、話し合う中で、Mさんは再び通い出した。

いよいよ園芸で土づくりの季節がやってきた。幼児部のメンバーは準備のことが気になり始めたが、Mさんはなかなか取りかかろうとしない。話し合いを持ち、気持ちを聞くと「先輩から一人でスケジュール表を作ることではなくて、もう一人の担当の人に相談したり、繋げたりするようにと言われたが、そういうことは面倒くさい。自分は担当だからやらなければと思うけれど、どう動いたらいいかわからない。だいたい毎年同じことをやっているのだし、みんな先輩なのだから、何をやるかわかっているでしょ。去年も何とかなったし」という気持ちが出てきた。

先輩は「自分にとって都合の悪い条件が来ると不満が出ることは共通の課題です。それと去年も何とかなったというのは、周りが助けてくれていたからだよ。責任を取るということは自分一人でやるということではないよ。中心になってもらうけれど、みんなでやるものだから、まずみんなで話し合ってやっていこう」と話した。

ちょうどその頃Mさんの母方の祖母が容態が悪くなり、入院することとなった。皆が「昨年生まれたRちゃんを大きいおばあちゃんに会いに連れて行ったの？」と聞いたところ、まだ連れていってなかった。「なんでおばあちゃんに会わせてないの？」と仲間から聞かれたところから、Mさんのなかに「私はおばあちゃんにかわいいと思ってもらっていない、妹は愛嬌があってかわいがられたけど」という思いが出てきた。それを聞いた仲間からは「自分の見方でおばあちゃんを見ているけれど、本当にかわいがられていなかったの？　自分が覚えていないだけではない？　このまま会わなかったらきっと後悔するよ」と言ってもらい、Mさんは「そうかもしれない」と思った。そしてすぐに妹と約束をして一緒に祖母に会いに行くことができ、祖母はとても喜んでくれた。そのあと、大人しかった次女がとても元気になり、その姿を見てMさんは母親である自分がいのちのつながりである祖母と心が通った時、それが子どもにつながっていくことを感じた。

先輩はMさんに「草花を育てることは、子育てと同じ。毎日水を与え、栄養を与える中で、芽が出、双葉を出し、少しずつ成長するのを注意深く見守らなければならない。子どもが泣いたら『おむつかな？』『ミルクかな？』と愛情をかけて育てるのと同じなのだと、私も先輩から教わってきた」と話すと、Mさんは自分もそうして愛情をもらってきたのだと思えた。そして植物のいのちと人間のいのちは別だと思っていたけど、植物も人間も、いのちを受け渡されて、次に受け渡す同じいのちだと気づいた。そして種まきの日には、Mさんが発案して作ってきた種のまき方を教える紙芝居を子どもたちに読みきかせたり、歌を歌ったりしてから、皆で楽しく種まきを終えた。その後毎日、大人も子どもも一緒に水をやり、今双葉が育っている。子どもたちは観察日記をつけ、早く大きくなあれと声をかけ、花が咲くのを楽しみにしている。

インドネシア在住のメンバーから

宇田川朋美

私はインドネシア人の夫と結婚し、約十五年間東京に住み、五人の子どもに恵まれ、幼児教育部に通い学びました。

元々料理が好きだった夫は、日本のケーキに魅了され、この味を母国にも広げたいと日本で十四年間修行し、六年前に夫の実家のあるインドネシア・ジャワ島に移住して念願だったケーキ屋を開店しました。

私たち家族は夫の母、姉夫婦と弟の十二人で一つ屋根の下で暮らしています。家族は皆敬虔なイスラム教徒で、毎日五回のお祈りと、朝と晩に必ずクルアーン（イスラム教の聖典）の読唱を欠かしません。

夫の祖母は、まだインドネシアの小、中学校が義務教育ではなかった時代に、村に経済的に貧しく学校に行かれない子どもが多くいたことに心を痛め、私財を投じて誰でも無料で通える学校を創立しました。現在は夫の両親と親戚が引き継いでいます。夫は、ケーキ屋の収益を少しでもその学校運営に回したいと考えているのです。

私は言葉もわからず、文化も違い、田舎の何もない土地で、自分の部屋で寝る時以外は四六時中夫と子どもたちのほかに誰かしらいる生活は本当に苦痛でした。そして、自分の生活はおろか店も軌道に乗せることが大変だったので、毎日こんな生活は嫌だ、日本に帰りたい、夫のせいでこんなに大変だと責める気持ちばかり溢れました。

しかし以前から金子理事長に、私の課題となるものは夫に聞かずに自分勝手にやることと、不平不満ばかりでいただいているものに感謝がないと教えていただいていました。そのことを自分に言い聞かせ、また日本の家族や親戚の応援を思い出し、頑張ろうと前を向いてきました。

子どもたちはインドネシア語がまったくわからないまま現地校に転校したので、先生も友達も何を言っているかわからず苦労したようですが、休むことなく学校に通い、現地語を習得し、友達もでき、長女は陸上大会で県代表にも選ばれました。

昨年、五年ぶりに日本に帰国した際に、インドネシアでの生活のことを、理事長に聞いていただきました。日本は核家族化している社会だが、インドネシアの大家族のなかで子どもたちが育てられていることの重要性を教えていただきました。また、何でも自分勝手にやりたい私が、常に夫や義母に聞きながらやろうと努力していることが、子どもたちの成長に繋がっていると教えていただきました。

そして今歩いている道は誰のせいでもなく、すべて自分が決めたことなのだと押さえていただき、本当にそうだなと思え活力が湧いてきました。その関わりをいただき、意識を切り替えることができたその頃からお店も更に軌道に乗っていきました。

世界的な問題である新型コロナウイルスは、インドネシアでも感染者が一万人を超え、政府は手洗い、うがいはもちろん、外出時のマスク着用、ソーシャルディスタンスの励行、宗教活動は自宅でと促しています。人口と感染者数が多いジャカルタやスラバヤなどの大都市には大規模社会制限がかかりました。インドネシアは国民の九割がイスラム教徒で、四月下旬から断食が始まりました。通常でも断食期間は泥棒などが増えますが、今回の制限で更なる治安悪化が危惧されています。

先日、店のトイレの天井が急に落ちたことを東京の本部理事に繋げて教えていただき、異文化の大家族の中で、義母や義姉への不満があっても、常に周りを気にかけ、相手を立てつつ、共に暮らすことは大変なことだけれど、それをさせてもらえているのだと改めて思いました。

現在長女は高校三年生ですが、世界の困っている人の役に立ちたいと医師を志し、海外に留学を希望しています。次女は中学三年生、三女は小学六年生で、自分の道は自分で切り拓くとイスラム教の全寮制の中高一貫校に七月から二人で通う予定です。小三の長男は、三女から積極的にアラビア語を学び、幼稚園年長の次男も自分の意志で午前三時に起き、朝食を取りその後の断食を頑張っています。私自身のさまざまな葛藤の中で、子どもたちがこのように逞しく成長しているのだと思いました。

世界的なこの状況下で、理事長が書かれた最新の機関紙記事を拝読し、そこから改めて、私自身がこの異文化の大家族の中で、毎日調整を図り生活させていただけていることの価値を確認し、感謝になりました。